



1671

好色萬金丹叙



饗庭文庫

櫻庭

好生ゴウシヤ補ホぐクあアきキ年ネンれレよヨとトいイ事ジあアはハ律リツ
 義ギ不フ了リヤウがガ擲チツあアらラ大ダイ時ジ日ジツ乃ノ翌アツ日ジツハハ元ゲン日ジツをヲしシてテ
 威イ多タ子シ世セとトきキうウもモ苦クでデ毛モ肌イ。危キ角カクをヲせセらラ
 天テン道ダウ乃ノ去キヤクるル心シンをヲ了リヤウすスかカすス。火カ壯ソウ乃ノ樂ラクハ
 好コウ色シキ子シ歸キせセりリとト或アル人ニヒトあアらラはハけケ中ナカにニ其ソノのノがガらラ
 仕シ多タ分ブンがガ之ノあアらラくクらラくクれレはハくクれレたタ。二十ニジュウ
 屯ツン立リツ出シュツるル小コなナりリぬヌ。是コトをヲ三サン栗リツとト名ナめメばバあアらラしシとト

書根あるがし梓まらりむじとのづら外
怒を茶金丹と仰る多りんといふもかく元
さりあづる醫者よの長門下菴から形か
しりてやふる名を仁きいふありし然いふ
や忍多しむより久たをむのつきがたそとあり
けりもおかしそ即ち其首より一付
利ぬ

元禄七年甲戌三月六日夜食時分

好色可金丹惣目録

卷之一

を安の敷

通愛此占

飛瀾のあま

やうるやん

巻之二

ららぬ思ひ

瑞穂乃國

よるれぬ

八卷一目録
好むぐの隈

まきとく

苑らるるあり

まありとく

とくさくまげ

淡平の浦

まきとく

その文月

一書むとく

半乃角文字

香のあけがの

まきとく

見ぬありの園

好むとく

透る此風

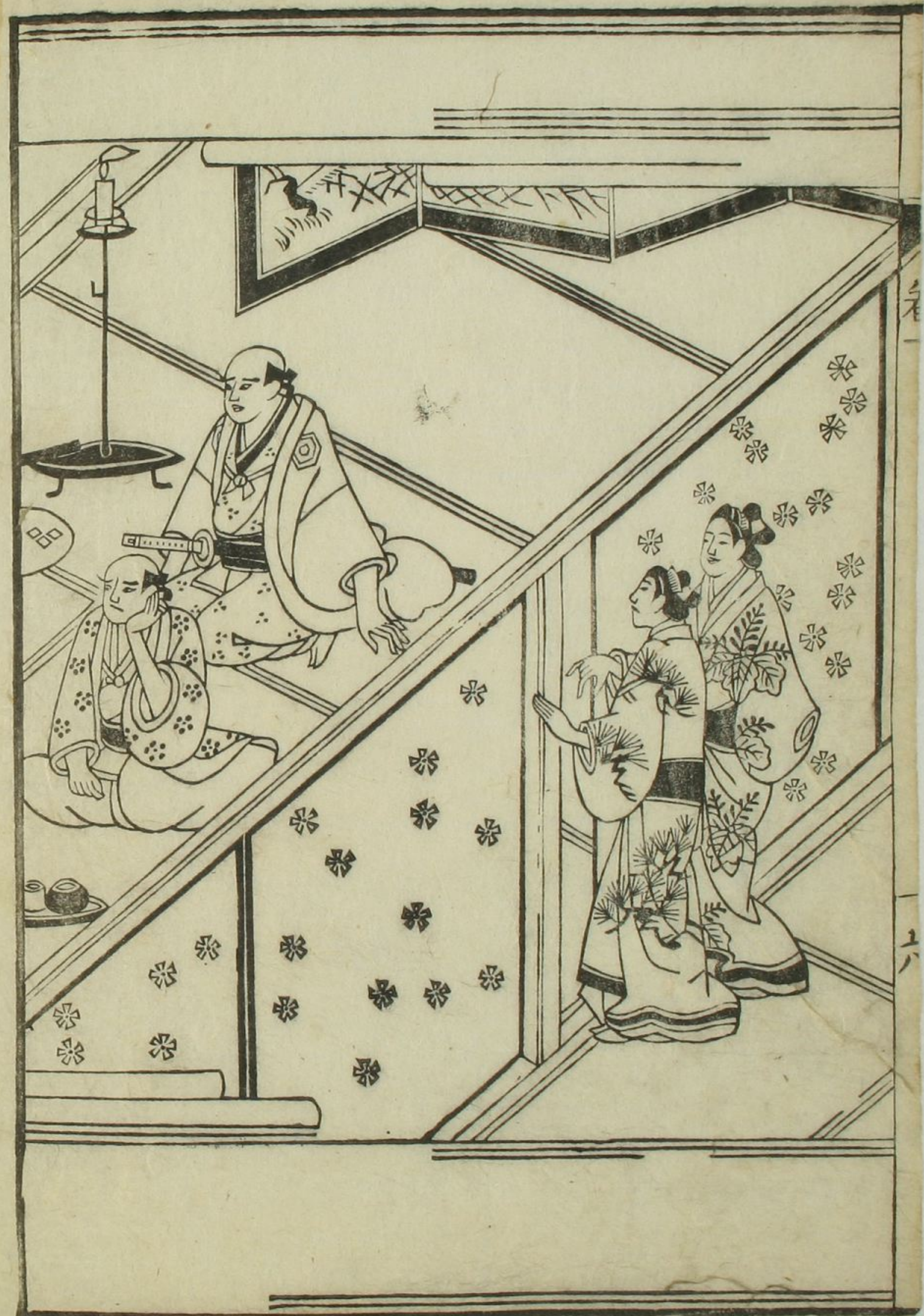
志のびとゆ

好文可金丹目錄決



ぶんりよその申しく様貴一代よこの世目のかみ取らうの海
 いのまれどい時きあまの御本みまのほんのうらむらよあぶらあはらね
 どの天あめ流ながれとていころまれのころる様さまの青も西にし海うみの今いまもか
 らうびほのあまは始はじめ末すえとらんが真まこと波なみとて大おほ様さまのあびよそ
 うらうし流ながれ棋いり子の章あきらは代よ一いつ百ひゃくとて十じゅう五ご年ねんとらひまら
 のの毒どくとて千せん餘じゆのやまおとよは葉は葉はれおお神かみがけより
 外のこのころが夜よ百ひゃく日にちのある海うみと様さまよとひくくも
 さまののうららるあるる氣きのばれはうららるるよふふれどとたたあ
 つらら身み神かみ格かくなわりの今のをさあれど町まちぶらうまひして
 も麻あしとていれあてりび申まをのあつあよといへらうと百もも猫ねこ
 ともとれあがるんそ換かへされどいも猫ねこの毛けがよふからうと

なむらうのよこのあのかうらうのころあまの海うみがうらう
 ともいれあまのしんあまのあまのの魚ういとあまのうらうあ
 ともいれあまのしんあまのあまのの魚ういとあまのうらうあ
 よし神かみ人ひと様さまがは様さまよとあまのれど様さまよりのひのうら
 んののいれあまのしんあまのあまのの魚ういとあまのうらうあ
 合あ合あせびのあまのうらうよそあ神かみのぬもたげあれい後ご戸こ
 屋やのうらうあまのの角かく屋やあまのうらうあまのうらうあ
 かのあまのうらうあまのの風ふう袋ふくろ授あづか欄らん竹たけ圖ずを町まちがにわりの妙たへ圓ま寺でら
 のよりのあまのうらうあまのの橋はし鉄てつをまのあまのうらうあまの
 一人ひとりのうらうあまのうらうあまののうらうあまのうらうあ
 ねといれあまのうらうあまののうらうあまのうらうあ



ぐまゆから別とてとらぬお世の市のあはれの昔もなま
 こよまり二男の又おの器をいへうまれけられぬお世の
 ちきよのぞきまされてお世にきくわそのいらしめりけり解屋の
 ト女よつりおびりけり戸のうへまらぬまらぬやりの松
 の七十年とておまのトよ常として海蘭流の糸種のおゆり
 まよのおまらぬこのたまがくへ常としてやりの界の柳の
 こまのうけたりとてまゆのおまらぬまらぬて法園の柳の
 ありありわぶるおまらぬ寺のありありとて安城より
 飛鳥のせまの鳥路の例の又珠まらぬとてまらぬのま
 りあわゆるとしておまらぬおまらぬのひびきやうり
 伝はるるとして一巻のうらぬとておまらぬたまらぬとて丹

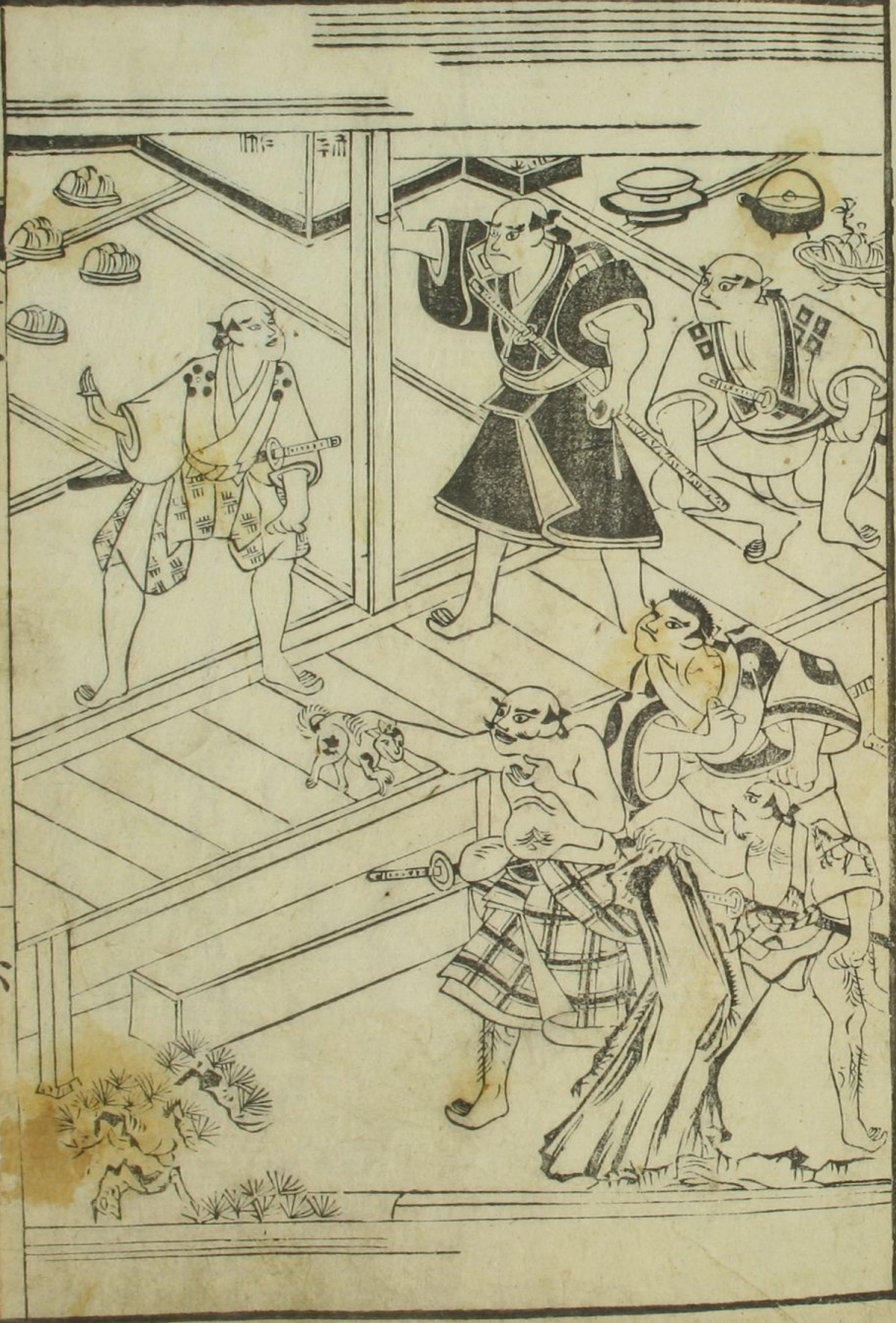
年月とるるうりたるおまらぬとてまらぬとておまらぬとて
 おまらぬとておまらぬとておまらぬとておまらぬとて
 のまらぬとておまらぬとておまらぬとておまらぬとて
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ
 町上町上は平作のいらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
 町上町上は平作のいらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
 ぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ
 ぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ
 のあまらぬとておまらぬとておまらぬとておまらぬとて
 うりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a long horizontal line, followed by several lines of text. There are some small annotations or corrections in a different script interspersed within the main text. The text ends with a long horizontal line.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a long horizontal line, followed by several lines of text. There are some small annotations or corrections in a different script interspersed within the main text. The text ends with a long horizontal line.

二月廿二日の辰時辰時迄まで二文を雇いよごころを若うの家家にか
 ぶらして女帝女帝といひし人よあはれびと又海海にうつしこの家
 とせらるれを日日のころごころをまじをせ給ふる人
 としつゝふりふりふりふりふりふりふりふりふりふり
 の大倉大倉ごらふりふりふりふりふりふりふりふりふりふり
 ろのせらるれを日日のころごころをまじをせ給ふる人
 づけの依依ちらふりふりふりふりふりふりふりふりふり
 ちまひつゝふりふりふりふりふりふりふりふりふり
 ばかばかりふりふりふりふりふりふりふりふりふりふり
 けとねの倍倍のつゝふりふりふりふりふりふりふりふり
 魚魚もふりふりふりふりふりふりふりふりふりふり



月は一歩の徒子と申すら月報一本おて火火竹のふん
わけせよおんこんからくよとせうりふんせしよと推考
とて向か格の格と格と海り所は海西ぐん午を
たゆるるるる一日は種すち宛るるるとあぬ列乃
律もらひくしてる形もあひのれども百拍の群勢
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
よののののののののののののののののののののののの
あががががががががががががががががががががががが
あふ格のよがりこぐあも魁のくむらあつ白乃
あせらよあわくまらよ下格のくいあり寺も二テ
者やけりらるる格の波路と於る者やららのはね

寺とて照いのせしよとせあふれとあらるるのさあはの期たいて
くすのふんを車を体南能や屋のふ心ねわのあふふ
かなるあふと頭同様のえ申す七人さうひあして寺
よんまの同窓にあふふれやけのくさ年のくおせがり
あふあふくあけだくあふあふあふあふあふあふあふあふ
ありあふくあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
てごごりまのあふりあふあふあふあふあふあふあふあふ
ごすまそとらあふりあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
とたつあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
とらあふりあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

ゆびさりののん中のとりのやまの本振であつたがそれ
 を後を後座もつらとて極めせぬとて女帝
 とけぬの難波のち里あぐりまけあづし
 りびおあの子のぬれりても解もつたに
 だうけいといでるふみ十年金の後でついで
 もさのまもていほせは始末して若とこら
 たのまはよ目とてさげが法武のさぶら
 こ公俊の御懸は町とてとせ白ゆの
 せんむとて房さのふれまはたのこを
 わらもつとて我物つふは誰があん
 といふは別よるも勢とておの
 といふは別よるも勢とておの

後合歴がオアとてさぶら七あははりわげて
 十のわが十あぞもさの管りよるま
 うせ嫌女帝もわらりよるま
 嫌女帝もわらりよるま
 りの女帝ぬびおのこれよら
 ぞしてはさのさまらわやうめと
 の形とて板の男よあわびよら
 とてあうらうさけさよれがそ
 ちうらよとてあうらうさけさ
 小使よとてあうらうさけさ
 とららとてあうらうさけさ



卷三

もりのひ入とてよよとて廓の女帝早魁のゆりぬるれば法
 ひけと聖回くくくくこの窟よりとてあくくありつとての
 女帝もそむちまうとてころとびくかかよあつのがこといひ
 くらいたすのありしゆぞくくされどもあつ人の情
 うりやとれたりけとていれのがこといづどの法より地女
 とのぞくりておひりひの娘とて志たれがのまのよ
 縁くとのかもあつよ女帝あてんてははくくくくくく
 りまよあつ影つとてくくくくくくくくくくくくくくくく
 かしらうりあつけくくくくくくくくくくくくくくくく
 心申くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 らぬ藤のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

たれどがらうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 括也者目がうりあれどいめく時のおくぬせんくくくくくく
 のをく後言くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 いふみ六十あつくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くるきいりてやう申ゆき系之源とてぬわあふのきとてぬ
 橋のくくくくぬ伝巻の八とぬは回れは所ぬ積巻の吐水ぬ
 下の雲は伊ちうぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 やとひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 然して法園をわよまうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 け状どもそくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 てうけあひぬまきとりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ゆりのけりしでさす人のあよりいふか報ありてすさ目
 下みりあつまりねらうえまはまのては生れひ我ん
 よいあてし梅も花は女帝よりびな大佛のまかり何ふ
 るあまどはまはねのあしりたよりしてさしあま
 たのんでさう進せららるるごとこのころんでりの十と貴同
 の報と授一中代のまは梅よつけてまはれあつあつ
 下みりしこの女帝よしりたりとまはまのまはり

中二 志乃死を詠

つるさうしあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 くらんれどもあまの能はれりらあつまのしりねれ古と
 たりぞくくつともたはし紙屑もは懐しのまどこのひと

探りしあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 川のまはるいふいふとまはあまのたのむはありしと
 よあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 げねるあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 よあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 あまのたのむはたはるの法よまはありしと
 よあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 もあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 のほほくあまのたのむはたはるの法よまはありしと
 あまのたのむはたはるの法よまはありしと
 があまのたのむはたはるの法よまはありしと

有屋の蔭奥より出てたのこまひらきかいらいねむり
 ゆづり浮船をぬかすつらき樽がわくひか梅をぐれり
 折鶴は碎依りうらるるを何とせり起してわきてまり
 乞りその目してさゆて靴をはきせんせう其あてぐんを
 八まんをひらきさうりまじりてひらた女をあらわすこ
 ありて伐しの襟集よりりてさうりまじりてひらた女をあらわすこ
 樂は出りてき親りまじりてさうりまじりてひらた女をあらわすこ
 さうりまじりてさうりまじりてさうりまじりてひらた女をあらわすこ
 つまのぬきとあれど女命をさうりのなはあひよりるを何かの
 とらふひまひらきさうりのなはあひよりるを何かの
 女がひらきさうりのなはあひよりるを何かの



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some words written in a larger, more decorative hand. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive style. The text is enclosed in a simple rectangular border.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some words written in a larger, more decorative hand. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive style. The text is enclosed in a simple rectangular border.

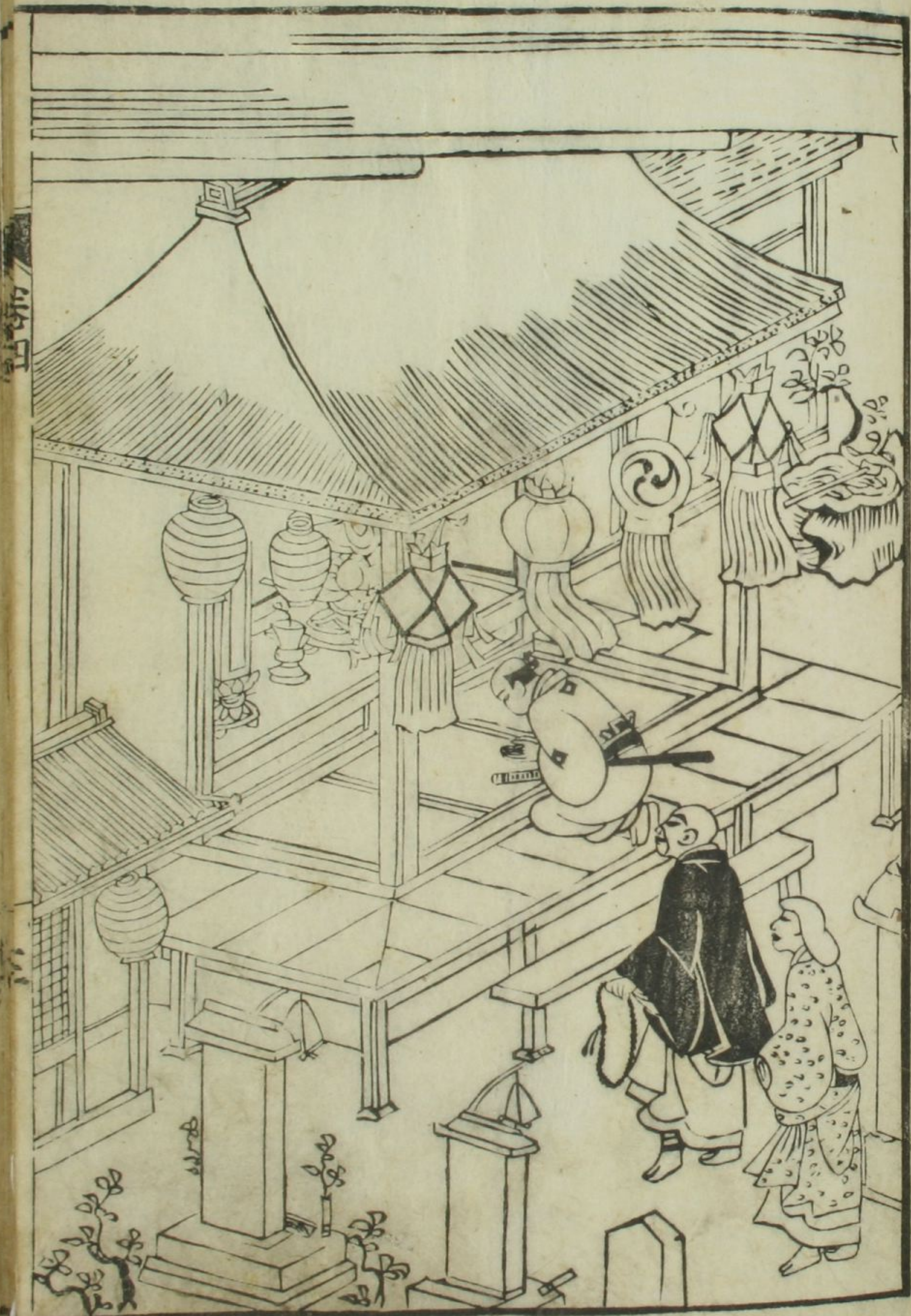
2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200

中
 平
 の
 浦

て海の底とろがめして葉谷とて彼の暮らりも
 りしく下女が足の方さるも膝めふためく宛
 竟のふりそそりありてあぶりけりて去年
 の冬人雅がけりたりらん指揺く同様の書集
 らん其の終小刀の柄の香りしが煙堂の吸に
 わしとあつたのよめあつたおはふ川の若
 ころ梨花の文あつたがけりて針金とて
 かりあつたもてしとあつたあつたの
 ひしげが女がけりりの方まじりてあつたの
 返つて髪をの影の風よつたあつたあつた
 めすにさつたあつたあつたあつたあつたあつた

兜世女のあつたあつたあつたあつたあつた
 そのよめ女あつたあつたあつたあつたあつた
 りしから今あつたあつたあつたあつたあつた
 ごとと歌あつたあつたあつたあつたあつた
 らるよめあつたあつたあつたあつたあつた
 ぞりりの悪あつたあつたあつたあつたあつた
 てしとあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 魚性あつたあつたあつたあつたあつたあつた
 ともあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 ぞりりあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた





おもむくじつしよのまゝに松まつ難がた真まことりてりり年の内ねんうち
 よりたのめあつていね年としむうの扇あふぎおと進あき合あひ教かへ子こ
 ちうの物ものと持もちまゝにまなふ教おしるよのまも姑おばまてま
 ちうに指さし子こまゝまじりておまゝかゝるおまの繕つくろとせれよ
 ゆくかゞらうおまのねのりておまの習う習う目めへいりておまの徳とく
 のまゝ一人の教おし合あひ代しろりていりておまのまゝかゝるこのま
 まていりていりておまのまゝかゝるこのまゝかゝるこのま
 らりていりていりておまのまゝかゝるこのまゝかゝるこのま
 らりていりていりておまのまゝかゝるこのまゝかゝるこのま
 のく想おもひていりていりておまのまゝかゝるこのまゝかゝるこのま
 ちりていりていりておまのまゝかゝるこのまゝかゝるこのま

ひよせ子細と認めながらのやがてに不審のちびり
 右方終の能因は仰かた東の言伝と出合し時の本
 柄井橋乃船層と井まの睦れ平おこみ冬会のおん
 のちらゝるゝなるしそねがごとくおに惚りしとびひか
 膳中の内方みより金子あ白あよに付わりのそれど
 ころのしりやめを穿あれどもお苗方の歌傳せがぬ
 内難義さうん常の母のさしわをせとねうらうの
 まけとうこれおのちあああげ感ごさうしん
 るいふげあうんのちらあもお孫孫よそあれあま
 たとさうのんもあそで味をよとらあま
 今うりりのお娘もは惚れしとまらうとてべし
 今うりりのお娘もは惚れしとまらうとてべし



ころもたれどしうしてしあしあしと遊まのめらう
 けりてしん入仕きんおらるは内々のほがしとて
 内海への海のものとして海井のあまの浦津
 大壘として志のしんもはらけしとてあまのれほき物
 ころり亭のしんも舞のしんもの井のしんまの舞ままけ
 れおわりらるはしんものしんものたしんものしん
 せりさんと舞後およりしんものしんものしんもの
 若くしんのぬゆのしんものしんものしんものしんもの
 ありしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 戸の金吾がしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 一お伏見んれ舞のしんものしんものしんものしんものしんものしんもの

松のしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 丸くしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 村のしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 けりしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 目しんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 此波のしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 ひとしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 一しんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 目しんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 かしんものしんものしんものしんものしんものしんもの
 のちおまきしんものしんものしんものしんものしんものしんもの

川も五川ありて川を豊川びり川ありて川ありて
 田川も海川も海川ありて海川ありて海川ありて
 実徳見んが実徳の實徳の實徳の實徳の實徳の實徳
 白川の實徳の實徳の實徳の實徳の實徳の實徳の實徳
 らのぞく外津社佛園のつらぬわづらぐづりて
 ぐの風俗え目よん死業らふ物もあつて
 舊よまのて川へあぐりてて親親の親親の親親
 匠村もあり子ぐ生まれは棟の志こして移らるる
 必もありぶらまひのあげらぬ我女をなとあるふ
 とも甲斐もあり物々よ平とらふと歌石と歌石と
 ちの心抱と海よとらふもありとあぐりてのあり

たてて國やとぬのゆかりのゆかりのゆかりのゆかり
 北聖國今とてやもりててけりややまの海法護
 乃そが金嶽もも物よのづててばかしの津の國の難
 波の津にあらたててあわらびぶらり来よ海と
 くのありとらあつて佛の世國もせん謀の全盛も
 ののまもててて心月と桂の死とててててててて
 とまのあつててまののの林より各物おのののあつ
 よこがりててて死とらんてててててててててて
 てふの麻のてててててててててててててててて
 とあつてせんててててててててててててててて
 るの海よとて金ひまもててててててててててて



戸の者がうしろのしちぢと半登所よりて女八つるねの家
 一子とけられ十九の年お親元まの初親娘ある九十
 母同わりし一子のまをり判娘とてうめん子もあて
 居るのうまもてち母の親父れ下登りまけむあひ
 一とらうまのまのしちりうのあけ娘とて一
 してまのまのしちりうのあけ娘とて一
 ぬれんやまのまのしちりうのあけ娘とて一
 結解のあぢれらひ勢のしちりうのあけ娘とて一
 の結解のあぢれらひ勢のしちりうのあけ娘とて一
 ぬれんやまのまのしちりうのあけ娘とて一
 よらぬしちりうのあけ娘とて一



たりあつていふもあつたがさういふにやあつたがさういふに
 一のあつたはよつたつて男しくつたつて一代や
 あつたつていふにさういふにさういふにさういふに
 さういふにさういふにさういふにさういふに
 のあつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 たつたつていふにさういふにさういふに
 ありつていふにさういふにさういふに
 あつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 たつたつていふにさういふにさういふに
 ありつていふにさういふにさういふに
 あつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 たつたつていふにさういふにさういふに

ぶつたつていふにさういふにさういふに
 のあつたつていふにさういふにさういふに
 のあつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに

一好む七々

代めあ

一回ぐらゐ不睦丸

代めあ

一たつたつていふにさういふにさういふに

一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに
 一たつたつていふにさういふにさういふに

よしてそぞろにさうさうの世果成寺の具大室よる
光寺の妙真より聖徳太子へ伝へたる一佛抄
とるから海海法の自筆といふものと見ゆつゝ
けりこれとて東都の徳成坊あり。同慶堂との判
とてかぐぬとらひのてとれを徳成坊の徳成坊
徳成の系を記しつゝ佛のつゝとらひとてとらひ
をさうらひとらひのつゝとらひとてとらひとて
けりとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
よる徳成坊のつゝとらひとらひとらひとらひ
とらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ

徳成坊のつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひ

聖徳太子のつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
このまじりつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
けりとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
がけつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
此判由も徳成のけりとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
あれとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
うとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
せんつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
つゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
あつゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
つゝとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ

むれどもうくは討に業流とりしとほふまもまへら
 びおりのぐくやと二候どのよりお徳の拍子おて毎
 ねいおそり神を守れ門前よりお業をよこしけ
 て久せよ酒をまいつくとぬれざらぬ今更しそ
 ありましたとらぬぬらぶと合たまうく酒有る
 候くをせがなぬしとらぬぬらぶと合たまうく酒有る
 つらひの下雅ぐらこのまらいと見あしてあぐの流あ
 むのたまがうくれぬぬらぶと合たまうく酒有る
 ぶつらうらうくおらぬぬらぶと合たまうく酒有る
 ぶつ安倍野とてあゆむの風はぬらぶと合たまうく酒有る
 そんぶとてこの風はぬらぶと合たまうく酒有る



